

2010 年度広大マスタース市民講座報 “ 野っばら探検講座：みどりの牧場で土の世界探検 ” を終えて

安藤 忠男

今年も 9 月 12 日（日）の午前 10 時から午後 3 時まで広島大学の付属農場で本講座を開催した。あいにく敬老会での発表などの他の行事と重なって受講者は 4 家族 11 名と少なく、市生涯学習課の梶永さん、倉田さん、広大の学生ボランティアの秋月さん、高松さん、上中さん、それに講師を務めた私を加えて総勢 17 名であった。

午前中は小学校 5 年生と 6 年生の男の子 2 人と彼らの母親の合計 4 名だったので、スタッフも加えて皆で土に関するクイズの答えを実験などで探す遊びをした。クイズといっても「土は何色？」、「土の中の隙間はどのくらい？」、「土は何からできている？」と言った類のものである。母親たちは子供と一緒に実験するのが楽しいようであった。お昼はきれいに刈り込まれたローンの木陰で持ち寄りのお弁当を皆で話をしながらいただいた。お母さん方は手の込んだ昼食を用意して下さり、特に学生諸君はご馳走を一生懸命頬張っていた。

昼食が終わった頃、さらに二家族 7 名が加わった。皆で農場のヒツジ、ヤギ、ブタ、ウシなどを見て回った。これらの家畜を身近で見る機会が少ないせい、子供たちは興味を大いにそそられた様であった。トラックスケールでは、皆でその上に乗って全員の体重を測定した。1kg 単位で正確に体重を測定でき、歓声があがった。

スズメバチの巣が二つもあるトンネルを静かに通り抜け、森の間の牧場の横を通り、見晴らしの良い 13 号ほ場に向かった。途中、道路わきの切り通しの表面を削って、土の下の世界を少し覗いてみた。花崗岩が風化してできた土はまるで岩石のように見えたが、子供たちが手にとるとボロボロと崩れた。

13 号ほ場のてっぺんに立つと、サイエンスプラザから新幹線の東広島駅、ピラミッド型の運動公園、さらに遠くに野呂山などの山並みが秋空のもとに広がっていた。広々とした野っばらに出ると子供たちはもうじっとしていられない。この後小一時間、子供たちは 3 人の学生ボランティアのリードでゲームなどに興じた。子供たちが草地を思いっきり走る姿を見るのは実に気持ちが良い。



土の隙間はどのくらい？



牛さん、食べてくれるかな？



子供たち全員の体重は何 kg？



土の下はどうなっている？



早く登っておいでよ。



お兄さん、お姉さんと何して遊ぶ？

心配していた熱中症や怪我もなく、無事で楽しく講座を終わることができ、安堵した。参加してくれた家族、ご協力いただいたスタッフの皆さま、どうもありがとうございました。

野っばら探検講座も今年で3年目、最終年である。土を使って子供たちをどのようにして楽しく遊ばせるか思い悩んだ3年間でもあり、子供たちがブラジルやインドの土のサンプルの匂いを嗅いだり、泥団子作りに興じたり、草原を駆け回る姿に感動したりした3年間でもあった。

私は東京の山の手育ちだが、子供のころには近所に自由に遊べる原っぱ、森、川がどこにもあった。下校すると暗くなるまでターザンごっこや魚とり、虫取りに興じ、生傷が絶えることはなかった。今から50年ほど前までは日本全国どこでも見られた風景であり、子供たちは実に生き生きしていた。そして子供たちが自然の中で得た財産がその後の人生を間違いなく豊かにしてきたと思うのである。

子供たちは自然の中で遊びまわることが大好きだ。にもかかわらず最近では野っばらで遊ぶ子供を見る機会が少ない、と感じるのは私だけではあるまい。その理由の一つは、「危ないことはさせたくない」と言う親のためらいだろう。自然には危険がつきものだが、経験を積めば危険の避け方がおのずから身についてくる。親たちには少しの勇気を出してもらい、子どもたちと一緒に自然の中で遊ぶ楽しさをもっと味わってもらいたいとの思いから始めたのがこの「家族で挑戦！野っばら探検講座」であった。この講座に多くの家族が参加してくれたことに感謝しつつ、週末を自然の中で楽しく過ごせる家族がさらに増えることを願っている。